

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤2

空しく過ぎるひとなし

親鸞仏教センター所長 本多弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第129回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第126回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「身ひと独もなり空しく立ちてまた依るところなし」（『真宗聖典』72頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。「空しく立ちて」というのは、周りに頼るべきものがないということ。天親菩薩の『浄土論』では「空過」、空しく過ぎるという言葉があります。この人生はどうやって見ても空しく過ぎるという面をもつ。だから空しく立つというのは、「ああ、この人生は一体なんだっただろう」と、時には思われる。これが人生だったのだと頷けるようなものが感じられない。

ところが、阿弥陀如来の大悲あに遇うということの意味を、親鸞聖人は空しく過ぐる者はないと言われる。つまり出遇ったことがもう十分意味を与えてくださっている。それは天親が不ふ虚こ作き住じゅう持じ功こう徳とくと名づけている浄土の功德です。我々は「空しく過ぎていくな」と自分の人生を感じたときに、「南無阿弥陀仏」というひと言で、「ああ、空しくなかった」と思えるか。そう教えが聞いているかということ、人前ではこのような偉そうなことを言っているけれど、自分自身は「ああ、空しく過ぎたな」と感じてしまう面もあるのです。しかし、「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき」（『聖典』490頁）と和讃で親鸞聖人は語っているわけだから、「ああ、そうか、やはりそういう出遇いをしなければいけないのだな」と。



そういう出遇いをするという事は、「現生げんしょうに十種の益やく」（『聖典』240頁）、利益りやくを感じずることでもあり、「願生彼国、即得往生」（『聖典』44頁）、願生すれば即往生すると言える人生なのだ、そういう頂き方をするということなのです。必ず往生するぞと信ずるのではなくて、『無量寿経』で語っている往生するということは、浄土に生まれたら正定聚だと語っているわけですから、正定聚を現生で得るということは、浄土に生まれた功德を得ることです。そういう出遇いをしなければ、親鸞聖人が言うお言葉にふさわしいとは言えないわけです。それはなかなか大変なことです。それでも親鸞聖人は、やはり煩惱の身むざんむき、無慚無愧の身であると、そう言うのです。それと何ら矛盾しないはずなのです。そのくらい阿弥陀の光が明るいことを実感しておられるわけです。

これが若いうちはほとんどわからなかったですね。この歳になってわかるかということ、相変わらず何だかちょっとわからないのですけれども、それでも親鸞聖人がおっしゃる本当の信念の内実というものに近づいてみたいという思いがあるものだから、この人生で満足成就したと言える、そういう思いが本当に与えられるのならば出遇ってみたいと思うのです。金子大榮先生はそれを言っておられました。自分の人生は完全燃焼の人生でしたと。あそこまではなかなか言えませんが、少なくとも親鸞聖人は、心は愚かである、そして光は十分に与えられてある、自分の煩惱からは見えないけれど、向こうは見てくださっていると信ずるのだと。願力に会いぬれば空しく過ぐる者はないと頂かれたということは、こういうことなのです。不思議な言い方だと思うのです。

本研究會では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘から問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第63回

現代日本の階級社会と アンダークラス

橋本 健二 氏 (早稲田大学人間科学学術院教授)

2019年12月17日、早稲田大学人間科学学術院教授の橋本健二氏を迎えて「現代日本の階級社会とアンダークラス」というテーマで語っていただいた。橋本先生は、現代日本社会における格差の問題を階級という視点から捉え、格差拡大の原因と過程、そして現状を緻密なデータから明らかにし、格差縮小のための処方箋を提案している。ここにその一部を紹介する。

(親鸞仏教センター囑託研究員 大谷 一郎)

■ 格差拡大の原因

日本において、これだけ格差が拡大してきた原因として重要だと考えられるのは、近年進んできた非正規労働者の激増です。非正規労働者が激増することによって、労働者階級という一つの階級が正社員と非正規社員に二極化し、格差が拡大したということです。1992年の段階では、非正規労働者は1000万人ほどでしたが、その後1997年辺りから増え、2012年になると1700万人程に達しました。そして、年収に関しても、データから正規労働者と非正規労働者の格差は年を追うごとに拡大していることがわかります。

労働者階級というのは、資本主義社会の下支えをする下層階級です。しかし、どんどん搾取されて貧しくなっていくのかというと、そうではありません。なぜならば、労働者階級が生活できずに働けなくなるとか、貧しさから子供を産み育てられなくなってしまったら、次に働く者がいなくなってしまうからです。ですから、資本主義社会というものは、労働者階級にも最低限の生活は保障しなければ存続できないわけです。

ところが、現代の日本の非正規労働者は、労働力の回復はなんとかできて、次の世代を産み育てるだけの賃金は得ていないのです。このような状況にある非正規労働者は、従来の労働者階級と区別される新しい下層階級になったのではないかと、私はこれを「アンダークラス」と呼び、アンダークラスが出現したと考えています。

■ 格差拡大の問題点

まず、医療費や生活保護などの社会的コストの



増大ということが挙げられます。また、格差拡大によって、すべての人の生活の質が低下するという問題があります。格差の拡大により、人々の間に敵意が生まれ、公共心や連帯感が失われます。このため犯罪が増加し、健康状態も悪化すると言われています。

何より考えなければならないのは、そもそも貧困層が大量に存在することは、倫理的に問題があるのではないかということです。家族を形成し、子供を産み育てるという一つの生物の種として人間が備えているはずの可能性をも発揮できない状況にある、その意味では、人としての尊厳が失われていると言わなければならないと思います。

それでは、具体的に何が必要なのかということですが、第一に挙げられるのは労働時間の短縮とワークシェアリングです。労働時間に対する規制を強化すれば、その分正社員を増やさなければなりません。正規雇用の拡大により、非正規雇用から正規雇用に移る機会が増えると、今度は非正規雇用が人手不足になり、賃金が上昇し、結果として格差が縮小すると考えられます。二つ目は最低賃金を大幅に引き上げることです。EU並みの水準、具体的には時給1500円程度に引き上げれば、非正規雇用で年間1600時間働いたとして、年収は240万円となり、非正規労働者同士で結婚して共働きした場合、世帯収入が480万円になります。それから生活保護制度の改革や税方式の基礎年金制度、いわば高齢者向けベーシックインカムを導入することも考えられます。

格差の問題はすべての人々に影響する問題です。しかも現在安定した生活を送っている人々の場合でも、アンダークラスに転落する可能性はいくらでもあります。アンダークラスの状況を改善し、格差を縮小して貧困を解決していくことは、すべての人々の利益であるという立場に立って、政治改革へと幅広い団結をつくりだしていくということが、現代日本の最大の課題ではないかと考えます。(文責：親鸞仏教センター)